
世界についての喜び

鎌堂成久

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界にとつての喜び

【Nコード】

N2859D

【作者名】

鎌堂成久

【あらすじ】

500年前に怒った戦争の裏には、人々の心に住む“悪”が起こしたものだった。それをすべて取り除いた聖人ラコジェ。その生まれ変わり、デイバルが自らの魂へ向けられた因縁と闘いながら、新たな“悪”を消し去る旅。

序

諸人こぞりて 迎えまつれ 久しく待ちにし
悪魔の一矢を 打ち砕きて 捕虜を放つと
この世の闇路を 照らしたもう たえなる光の
萎める心の 花を咲かせ めぐみの露おく 主はきませり

強いて言うならば、俺は世界の創造者。

「この世は狂ってる」

強いて言うならば、おれの名はラコジェ・キャンズ。

「だから、」

強いて言うならば、隣にいる男はおれの仲間。

「俺たちで」

強いて言うならば、その仲間の名はアルバート・マズルカ。

「作り直そうよ」

ラコジエ

これからライキは幼名から名を変える。ライキはラコジエと名を変えた。

その友達は既に名を変えてアルバートと名乗っている。幼名はミジャークと言った。名は変えなくても良かった。だが、これからやることのためには名を変えたほうが有利になった。

ラコジエは幼い頃に大罪を犯した。とは言っても、名を変えたのは十五。まだまだ子供である。そして、名を変える必要があるのはこれから、戦いを起こすからだ。悪魔と人間との壮絶な戦いを。

勝ち方はあってもラコジエとアルバートの二人が全身全霊を賭けても民の協力なしでは世の中が成立しなかった。

これまで幾度も殺人が起こってきた。その理由は「悪」に犯されたから。その加害者たちは人々に死刑とされた。

「これ以上死んじゃう人が多くなると全滅しちゃうはずだよ、だから俺はそれを止めたいんだ」

そんなラコジエの言葉に胸を打たれてアルバートはその戦いに参加することにした。

「これからが戦いの峠……」

ラコジエたちの敵はラコジエを信じない者 いや、悪魔にとり

憑かれた者や死者達だった。死者は「人形」に入り応戦を行った。

悪は術師を中心とし、広がった。ラコジェはある一つのこと以外はアルバートに相談し全てをさらけ出した。

それは『俺の悪は消しきれない』と。アルバートはそのことに全く気がつかなかった。

そして 五百年以上あとに同じことが起こった。

悪魔、否、旅人

聖なる者は其処に来た。

村人達はその者に、最高かつ最悪の歓迎をした。

「悪魔が来たぞー!!」

一番最初にその者を見た一人の村人が叫んだ。

剣を担いだその者是不機嫌に顔を上げた。

「ダーレが悪魔ってんだ……」

村人達が家々から斧や矛やら危険な刃物を多数持ち出してきた。

中には猟銃などを構える者もいた。

聖なる者は、

「……」

無言であつた。

そして、聖なる者に向かつて村人達が突進を始めた。

その距離わずか十メートル。すぐに「悪魔」に狂氣した村人達が襲ってくる。

聖なる者は身の丈ほどもある剣を前にいる村人に振るつた。

六人程度がバタリと倒れ、身体が真つ二つになった。

それから順調に斬り開いていく。

その向かう末には、教会に似た形の建物があつた。その建物の屋根には十字架の代わり

に蛇が二匹、反対の形に絡まつたような、他の意味でクロスしたものの乗っていた。

そしてその隣には白い女性がいた。

「ディバルウー！ 早くおいでよぉ」

聖なる者 ディバルの悪魔あるいは死神のような格好と反対に、その女性には天使ある

いは女神のように白い。その上、美しい。

ディバルは、

「ん……」

うなずくだけだった。

それが見えたからか、女性は屋根の上に美しく座った。

その間にも、小さい子供から老人　老若男女問わず関係なく襲ってくるので、その村人達を容赦なく斬って行く。

そして、教会が近くなりひとときわ背が高く美しい青年が立ちはだかった。

「どけ」

ディバルは言った。

「……退かないなら着いて来い」

「何処へ、だ」

青年は問うた。

「教会へ、だ……」

「聖ラコジエのナイフを取りに行くのか？」

「……ああ」

村人からざわめきが起こった。

そして、ディバルと青年の周りは開け人々がスペース造った。

「イルタラ、闘え！」

ひとりの村人が言うと、

「闘え！」「殺せ！」「消せ！」

村人達が叫ぶ。そして、次第にその声たちは、

「タタカエ！　コロセ！　ケセ　！」

まとまっていった。

青年　イルタラはその様子を面白くもなさそうに横目で見て、目の「悪魔」の瞳に己の瞳を合わせた。

そして、

「地獄に行くとき、僕の名前憶えていつてよ」
につこり笑って言った。

「僕は好む他の用心棒・イルタラ。イルタラ・マチスだ。これから、

手合わせ宜しく願います」

と言って、礼儀正しくお辞儀などをしているイルタラの眼は、刃物のような灰色で鋭く痛かった。

しかし、

「違うな。貴様は俺達の仲間だ」

突如、とんでもない発言を行った。

一瞬、村人達の間にとよめきが起こり、混乱を招くことになった。

「イルタラ！ お前も悪魔だったのか！」

「イルタラ！ 信じていたのよ！」

村中の者から嘆きの声が出た。

ある村人が言った。

「悪魔とイルタラを殺すんだあつ！」

イルタラは、その村人達の態度の急変に少々戸惑っていた。

デイバルは、ふと思いついた。

白い女

「アリス！」

白い女性の名を呼んだ。

「はあ……い……？」

教会の屋根の白い女性　アリスが返事をした。

「ナイフをこっちに投げてくれ」

「わかったわ！！」

ナイフを投げた。そのナイフは回転して、ディバルの手に収まった。

そのナイフは柄の部分にきれいな装飾があり、一見持ち難そうだがみえたが、その外見と違い、一度握れば持った者に対応して、少し筒形を変えするという不思議なものだった。

ナイフがディバルの手の中にあることにやっと気付いたイルタラが、

「なっ！　何をやっているんだ、そのナイフを祭壇に返して来いっ！　災いが起きるぞ！！」

と、ディバルを止めようとした。

「俺の後ろにいる……」

静かに力強く言う。そしてそれきり黙り、

「悪魔め、今度こそは殺してやる！！」

と、村人達が再度襲ってきた。

「雨の夜に乙女が流したその泪。これを集めたこの形。聖ラコジエの怒りの数を彫ったこの形。富みすぎるこの者たちを戻せ！！」

ディバルが言った。

その瞬間、暗い闇夜に神々しく光が満ちた。

「あなた方は間違ったことを思ってからっしゃいます。この者たちはラコジエ教に仕える者です。あなた方の仲間なのです。その者たちを悪魔として疑った罪です。神の成敗を受けなさい」

ディバルを通して、聖ラコジエが言った。

すると、ディバルに後光が差した。

その瞬間、「あ」「え？」などと村人達が言った。
そして倒れた。

余談

そして二時間後村から3kmほど離れた森に三人はいた。

「いつもどおりだったね。理由を訊く人は誰一人だっていない」

「……そうだな」

アリスが哀しそうにぼやいていた。

「……あなたたちはそうやって来たのですか？」

イルタラが問うた。

「ああ……いつだってな」

もつともと言う顔で言った。

「どうして……」

「……それはね、長くなるわよ？ それでもいいなら聞かせてあげるわよ」

アリスが代わりに答えた。

イルタラが頷き、ディバルが哀愁じみて背を向けた。

「ディバルは口に出したくないからなんだけどね……準備はいいわね？ 神々は怒るかもしれない。ま、別々の意味でだと思うけれどね」

アリスが声のトーンを落とし、恐怖の表情を浮かべていた。

イルタラは何故こんなにディバルたちが深刻な気持ちになっているのだろうと理解できなかった。

「そ、そんな大変なことだったなら無理しなくていいつ」

「そんなの大丈夫よ。余談になるけれどもこれがないときと話が読めなくなるからね。先に説明させて。まず、神は地上に存在し存在しえないってところから。ラコジエ教はここ五十年で発展してきた宗教よ。まず、最初に教えを説いたのは、さつきディバルの体を通して現れた聖ラコジエ・キャンズよ。あ、ついでにディバルのフルネームはディバル・ライキ・キャンズ・オーバー・クラドルっていうの。私の名前もまだだったね。私はアリス・ストラインっていうの。」

うのよ。可愛い名前でしょ。宜しく、イルタラ・マチス。我らが相棒！！」

余談がいきなり自己紹介へと移り、アリスに背中を叩かれた。

ホルアートのナイフ

「まあ、私の名前は関係ないけど、ディバルの名前は覚えたよね？」
どうやら、ディバルの名前がかかわってくるらしい。

「イルタラは賢いだろうから気付いたと思うけど、ディバルの下の名前のライキはラコジエの幼少時代の名前ってわかったわよね？
で、キャンズはラコジエの苗字でそのまんま。オーバーは家の称号よ。あとは普通に。判ったわね？ さてと、余談はお終いだよ。これからが本題。何故、私たちがホルアート村襲ったかって知りたいのよね？……それは、ただ単にディバル自身の所有物を取りにきただけ。そしてなぜ、説明してから取らないかという誰にも信じてもらえないから。ただそれだけよ」

とても遠回しな言い方だった。

「ひとついいですか？ 何故、聖ラコジエのナイフがディバルのものとなるのか僕には納得がいきません」

当然沸いてくる質問である。

「そこからが最も重要なところね。ディバルには前世があるの。その前世とは血の繋がりがあるのかどうかはわからないけどそれに近いことは確実なの。まあ、前世ってよりは先祖のほうが近いのかなあ？ ただ、その人の記憶がうつすらあるらしいのよね。私も見たことあるんだけど、その人は聖ラコジエの幼名を知っていてラコジエがそこにいて……その人を『師匠』って呼んでいたわ。ラコジエはその人の血を受け継いでいて、その人には奥さんがいて子供が居なかった。ラコジエを養子として迎え入れ、自分の弟子とした。世界の中にこんな記述や言い伝えはないけど、そのあと家を出たラコジエをその人はつけていて、その途中で病にあい死んだわ。でも、その記憶の中にラコジエが女性と会っていることがあったの。まあ、隠し彼女とか言うやつかしら？ ラコジエもお茶目だったのよね。きつとその女性との間に隠し子を作ったのかもしれない。そしてそ

れが直接のディバルの先祖さま、なのかもしれないの。ま、それ
て二百年以上前の話になるんだけどね」

「……観るってどういうことなんですか？」

少々迷った末に聞いた。

「えっとね、それ」

「感じたか？」

ディバルが口を開いた。その言葉は、はっきりと　だが、向き
はせず　イルタラに云っていた。

「……今感じた」

「あら？　なにかきたのね。　怖い……なんかあたりの温度が
変わってきてる……」

アリスも表情を変え、何かがいることを察した。

「じゃあ、そいつのいる方向へ行くぞ」

「わかったわ」

「わかたました、ってバカですか、ディバルさん？！　逃げるほう
が言いに決まってるじゃないですか！！」

イルタラの通常神経が与えてくれるつつこみがでた。

「ディバルは当たるほうがいいの。止められないわよ？　この戦闘^{たたか}
好き^{いバカ}ってのは」

アリスがアリスなりにディバルの弁護をする。

「もし、俺達を追いかけている者であつたらずっと後ろを気にか
けていないといけない。そうなるとあとから面倒だ」

ディバルはディバルなりに自身を弁護した。

「……わかりましたよ。行きましょう」

遠い東の国から

「ほう……生気が有り、知能の有る生物が中におる」

背の小さな少女が森の前の切り株に座って、燃え行く森を観ていた。

「しかし、のう……。いまさら消すなんて儂には似合わないだろうのう」

老人のような言葉が妙に似合う。

「お。出てきたらしいのう。だが、何故火に向かってくるのだ？」

炎の影から男二人、女一人が駆けてきた。

一人の男が女に服を被せ、三人で火の中をくぐって来た。

「誰だ？ お主ら」

老人言葉の少女　雪風丸が近くの高い樹に飛び移り、ディバルたちに声をかけた。

「あのう。その前にこちらの質問に答えて頂いてもらっていいですか？！」

樹を見上げてイルタラが聞いた。

「なんじゃ？」

「ここに火をつけたのはあなたですか？」

熱風が背中に当たりとても熱い。

「そうじゃが？ さあお主らの答える番じゃ。さっさと述べよ」

雪風丸は三人を急かす。

「僕はイルタラと言う！」

「私はアリス。ほら、いいなよっ」

「俺はディバルだ。降りて来い！　話がしにくい！」

ディバルの問いかけに、

「良いじやろう。降りてやる」

応じ、雪風丸が降りてきた。

「よかろう……儂の名は市室雪風丸じゃ。　遠い東の国から、全世界の視察に來た美少女じゃ」

雪風丸の爆弾発言に三人、

「『美少女お?!』」

絶句した。

「そうでないか？」などと言う雪風丸は名前の割にはかなりの美少女ではある。が、老人言葉からその台詞が出たことで三人とも目を擦った。しかし、何処からどう見ても肌の艶やかな二十代手前の少女にしか見えない。

「よく見ると、おぬしらも美的……だのお」

目を細め惚れ惚れしたように三人を見た。が、咄嗟に、

「あつ、今ディバルに目をつけたわね。ディバルは私のものよ!」
ディバルの所有権を主張する。

「ほう。おぬしらそういう関係か……あまりものはあるのか?」

まるで物を扱うような物言いだ。だがアリスがイルタラの腕をグイツと掴まえて前に出した。

「こいつがあまりものよ」

イルタラが驚愕に口を開け、雪風丸が「ほう……」とじっと見つめていた。

「よい。わしの恋仲になれ」

「……はあ?!!」

イルタラの口が先ほどよりも大きく開かれた。あと少しであごが外れそうになるところだった。

「それはいいとして、イチム口。貴様はここで何をしている」

必死であごを直しているイルタラを背にディバルが問う。

「森林観察じゃ。いや人間観察かもしれない　どのようにしてこの地域のものが火を消し止めるのかを見るためじゃ」

燃え盛る炎を見つめ、ぼんやりと答えた。

「どうじゃ、きれいじゃないかの?　儂はこの景色が気に入った。

そして、今燃えているこの樹木らは年老いすぎた。そろそろ地に這

いつくばっているよりも新しい若木にこの世を任せるべきではないか。その引継ぎの行為が樹木らでは出来ぬ。儂はその手伝いをしていただけじゃ」

先ほど、雪風丸が上っていた巨樹も既に樹齢数百年時を越え立っている。

「そんなことしたら神にさがら……いますよ……」

イルタラが痛みの直らないあごを必死に動かして反論する。

「そう……自然の流れに反することをわしは起こしたのだ。そして今、そんな儂を迎えに来たらしい」

雪風丸が目を細め、誰もいないはずの場所に視線を置いていた。

狂った？

三人がそう思った。

そして数歩歩き、右手を前に差し出し、炎に向かって、

「倒れる?!」

イルタラが雪風丸に駆け寄りその体を支えた。

「……ありがとう。おかげで儂はとても佳い夢を見た気分じゃ、雪風丸」

雪風丸の口から出た言葉は、雪風丸への言葉だった。それから雪風丸は目を閉じた。

見え透く策謀

「市室……さん？　死んだとか言わないですよね？」

ディバルとアリスに向けて問う。

「……この私が死ぬものか。イルタラとやら」

不機嫌な表情の市室雪風丸がそこにいた。

そして、その雪風丸は先ほどと口調が少々違っていった。

「どうやら、先刻の市室さんとは別人のようね。説明できるかしら、本物の市室さん」

アリスが推論し、問う。

「そうだ。先刻の奴は放つべき捕虜だ。私の身体を借り、そいつらは死後の世界とやらに“放たれる”のだ。そこは“楽園”といつてそいつらには、パラダイスみたいなのとこらしいが私はそう思わない。何せ、洗脳されてそう思わされてるってトコだからな。つて、意味判ったか？」

「全然わかりませんわ、イチムロさん」

質問を立てたアリスが答える。

「そうやって呼ぶでない！　雪風丸と呼べ、アリス嬢。私の故郷は、この地域と違い、「市室」が姓で「雪風丸」が名だ。とは言っても両親は男子が欲しかったらしく、私に男子の名をつけたのだ。酷いものだろう？　　どうだ、この地域では？」

雪風丸は左手に紙、右手に筆、とメモをする態勢に入っていた。

「じゃあ、雪風丸。私のことはアリスって呼んで。あとの二人も適当に呼んでいいから。　そして、話を続けて欲しいんだけど？」

頷いて、紙と筆をしまった。

「私は、詩人であり、霊能力者であり、国からの使者なのだ。私は詩を作り、心理と霊能の研究をしている。そして、いつの間にか沢山の成仏されない霊が憑きはじめた。そして、一時的に私の身体に入れ、やり残したことを達成させ“放つ”。それは今、私にしか出

来ないことだと思われる。それから、私は一度、身体を貸したおかげで成仏しそうになったことがあったのだ。そして私は死後の世界を見たのだ。そこはまるで強制労働をしているような地獄のような有り様だった。だが、そこにいる者たちは幸せそうに笑っていた。その時に私は考えた。それが、“洗脳”だと。そうは言っても私の論理中では世の中の言葉全てが“洗脳”だと思われる。それで“洗脳”されなかった物はそこですぐに死して、転生してくる。私は成仏前の霊たちを“捕虜”として呼称している。“捕虜”らは一種の生贄だ。一人の人間を殺し神に生贄と捧ぐとすぐに降臨する時とそうでない時があるだろう。そうでないときに殺された霊には未練があるのだ。成功したときはこの地上に何も小心を残さない奴のみだ。それを望み、“自称”『神』が降りてくる。私はそれを『神』だとは思わない。『神』自体がないのだから」

この世界には、宗教というものが成立しているのはラコジエ教しかない。その他の人々は自然神や先祖などを崇拜している。これによつて、“他人”というものを崇めているのはラコジエ教だけということになる。

「そうか……貴様は今この世を記録するために旅をしているのか」
ディバルが納得した。

森は燃え続けていた。

「消火しに来る人はもう来ないと思いますよ、雪風丸」

「何故だ？」

怪訝そうに見てイルタラに問う。

「……先程、ここから一番近くの村が全滅しました」

「それでもないぞ。一人だけ生きている」

「は？」「嘘よ」

村には一人の司教が教会に籠っていた。

「あるとき、シスター達は表に出てきていた。俺は……司教を見ている！」

「だけど、僕は司教様に言われて……そうだったのかっ」

「あー。ディバルが言いたいことは、その司教の策謀ということね
だんだん真実が見えてきた。

「その司教はお前らの探してる物。持っているみたいだ。“聖ラコ
ジエの最初の剣”」

“聖ラコジエの最初の剣”は、ラコジエがラコジエの父から授か
ったという幻の剣である。

その剣は世界に一人だけが“本当の使い方”を知っていると伝え
られている。

しかし、“聖ラコジエの最初の剣”は、誰も見たことがないと伝
えられている。

「ディバル お前は二度目の聖人になるんだろう？」

「何故、そんなことを知っている、貴様！」

雪風丸につかみかかり、首を絞めそうになっていた。

「やめろっ、ディバル！」

「そっそれは……私の、知識で……考えたっ、結果なのだっ、……
そして」

ディバルが力をゆるめ「そして……？」と、訊く。

「ああ、村からお前らについてきた霊が司教のしたことを私に告げ
てきたのだ。そして 村人全員が死んだ」

司教はその霊を裏に連れ込み殺していた。“聖ラコジエの最初の
剣”を使って。

その後、仮面をかぶり“村人全員”を皆殺しにしたという。

（不味いことになっている）

「……そうっ は？！ おかしい。何故死人が出ているんだ、貴
様っ……！」

「そうね……おかしいわよね」

「はあ？ だってディバル、君が村人達を殺したじゃないか！ 全
て！ おかしくはないよ。その司教って君のことじゃないのか？
そうだろうっ！」

事実をそのまま見ると“確かに”そうなるはずのこと。

「いや、俺は生き返らせたはずだ」

「そして、少しの間眠らせた」

ディバルの使っていた剣は“第二番・詞に込められた”という剣である。

その剣はラコジエがかつて革命を行った仲間のアルバート・マズルカに作り、そしてそれをアルバートが戦いに使ったという聖剣である。

そして、その剣には人を眠りに誘い込む“同調”という力を持っている。鞘を指でなぞっていくときに無声音ながら音波で人の脳を操作する。時には、脳を狂わせ、人を自殺に追い込む、恐怖の武器である。しかし、音波を使用している者にも影響が出るため、使用者側には音を操作する技術が必要とする。そのため、音を知り尽くしていないと使えない。

「……何か、煩わしい話になってきたらしいな……そして、私の使命が増えるようだな　お前らは村へ向かうのか？」

使命　“捕虜ら”を“楽園”へ“放つ”ため。

「貴様の話を信用してやる。俺たちはあと一つ　最初の聖剣を探さなければならぬ」

「少しの可能性でも信じるの、私たち」

「ということは　」

神を前世に持つ青年とその恋人と司教に騙された青年と東の異国の少女が旅立つ。

「うそだ……粉破微塵……」

「灰……だな」

村が無人になっていた。

そして、教会の前には八重歯を剥き出しにした祭服の男が立っていた。

祭服は黒き血に濡れ、手には黒く光る剣、口元は狂喜に歪んでいる。そして、その周りには悪に満ちた気配が漂っていた。

「この短時間で村人全員を殺した……か」

ディバルが呟いた。

「ねえ……ディバル。私ちよつと調子狂つてきてる。私には……力が強すぎるわ」

「だったら休んでおけ、アリス。お前はこれだけの霊に負けたんだろっ？　そして、傷一つ一つが痛ましく見えるのだから？　つま

り、お前は霊が見える」

「ええ、そうよ。よく判ったわね」

「同種には同調するのだ」

雪風丸が会つて初めて笑いを見せた。

「あつ、じゃあ僕が連れて行きますよ」

イルタラが進み出て、アリスに肩を貸した。

「少し、よくなったら戻ってくるわね」

「ああ、気をつけていつて来い」

笑みに見えぬ、微笑みで見送った。

司教は未だにディバルたちに気づいてはいない。

アリスの独白（ユメ）

「デイバルったら素直じゃないんだから」

肩を借りながらも苦い顔をしてアリスが文句をぶつぶつ言う。

「デイバルはとても無愛想ですよ。僕も思います。さっきだってそうですよね」

イルタラが「うんうん！」と言って頷くが、

「いや、私が言ってるのは『何でこんなときだけ笑ったりするのよ』っていうこと。まるで今すぐ死んじゃうみたいだわ」

「一つ、聞いていいですか？」

「なに？」とうなづいた。

「アリスはデイバルの何処が好きなんですか？」

すると一瞬で面を赤らめて顔を背けた。

「そつ、それはあゝ……ただ単にそう想うからなのよ！どこかっ
ていったら……優しい……からだ、思う」

落ち着いてきて「なんてこと聞くのよ！」と憤慨した様子だった。

「僕には優しいようには見えないけどな？」

イルタラは深く考えるようだったが、

「イルタラの優しいとデイバルの優しいは違うの　でもね、実を
言うと私が勝手にデイバルの恋人って言ってるだけで、きっとデイ
バルに迷惑かけてるかもしれない。だとすると、それを否定し
ないところがいいの。普段はあんな感じで怖いけど、本当はとって
も正義感を持つてるの。さっきだって村人を蘇生したのはそれから
でも、自分が“殺した”相手は生前の姿で生き返らせることが出来
るけど、他人が殺した相手は戻せない。だから、デイバルは自分の
正義を崩さないようにするために、敵と闘うの。きつと今、デイベ
ルの心の底は消えない炎が全てを埋め尽くしているはず。私は

……そんなデイバルが暴走しないために旅についてくるの。元々
はね、私は教会のシスターだったの。でもそこには聖ラコジエの杯

があつて、それをディバルが奪いに來たの。三年前の話だけ……」

一息ついてまた語り始めた。目をつむり思い返すように。

「そのとき、村中の人々が総出で、食い止めようとしたの。でも、ディバルの力は強大だった。みんなが死んでいったわ。ディバルを止める力があつたのは、私だけだった。でもね、そのときに

声が聴こえたの。『オレヲトメロ！　コロシテクレ！！』だつて私ね、『コイツ莫迦だ！　ひと殺しといって、自分も死ぬなんて卑怯だ！』って思ったの。それと同時にディバルが座り込んでしまつたわ。そのうしろ姿がレイラに似ていた　レイラってのはその時の彼の名前。イルタラみたいに優しい人だったわ。でも、ディバルが私から奪っちゃつたの　けどね、私、そのうしろ姿を見て『レイラ！』って走り寄つたの。そしたら、それがレイラじゃないことに気付いて目の前で足を止めようとしたらディバルが手をまわして抱きとめてくれたの。そしたら私ね、きつと緊張の糸がほつれたんだと思う。崩れ折れちゃつて、ディバルの腕の中でずつと泣いた。そしたらディバルが『すまない。俺のせいで、出るはずのない犠牲者を出してしまつて』だとさ。最初は全く信じられなかったわ。でもそのあとに私の首筋に生暖かい液体が流れたの。すぐにそれが涙だつて知つて私が寒いつて訴えてると思つたのかしらね。ギュツて抱きしめてくれた……そういうのが私たちの出会いだつたわ。そういうところが気に入つて、ディバルの彼女つて名乗つてるわけよきつと、ディバルは私のこと、なんか勘違いしてるかもしれないけど、思いが伝わらなくなつて、私はディバルのことが好きだから……

あ、そうだ！　私、出来るだけ早く戻るけど……ディバルが暴走したら、お願い！　殺す気で……止めてあげて……」

最後に微笑んだアリスを見て、イルタラはその場から走り去つた。

「お願い。早く、早く霊よ、消えてちょうだい……」

無意味な勝負

「……おい。行かせてよかったのか？ お前」

「あいつは強いから、いい」

アリスとイルタラが去り、雪風丸がその方向を見て訊いていた。

「何故、そうはつきりと“良い”と言い切れるんだ？」

「違う。俺は“いい”と言った。“良い”とは言っていない」

「それはどういう意味だ？」

この場のことを雪風丸はどう思っているのやら、ディバルを質問攻めにする。

「最初の出会いで俺を“止める”力を持っているくらいだから放っておいて“いい”ということだ」

“いい”と“良い”を使い分けている様子だった。

「お前、それ本心で言ってないだろ？」

雪風丸は目をつむりそれを聞いて出てきた結果として言っているのか。

「……」

それに対して、もつとも卑怯な無言という返答を行った。

「……仕方がないな。お前の要望どおりアリスをここへ連れ戻せばいいのだろ？」

雪風丸がやけくそになって吐き捨てる。すると、ディバルが足で何かを描き始めた。

ソナナコト ダレガイッタト キサマハイタイ？

(コイツ、性格が相当曲がってやがる)

さつき以上にやけくそになって、

「あー！ わかった。お前の勝ちだー！」

そしてすぐにその返答が返ってきた。

「だれがいつ勝負をしてるんだ？ やはり貴様は“捕虜”とでも話してるのか？」

「……お前、それは偽装というやつか？」

「何故俺が偽装する必要がある？」

その顔を見ているとディバルは正気でモノをいつている様子だった。

最初は《ディバルを雪風丸が巻き込む》という会話が《雪風丸をディバルが巻き込むという会話になりつつある。

「う……なぜ、私がこのような奴と話しているのがわからなくなってきたああっつ！……」

雪風丸が嘆き叫んだ、フリ　つまり、偽装　をした。

「お前の行動が原因だ」

ディバルは痛いところを衝いてくる。

「違うっ！！　あれは私ではなく、あのとき宿していた“捕虜”のせいだ！！！」

雪風丸的な正論を繰り出すが、

「“捕虜”を貴様は侮辱できないと思っていたのだが」

いじめているつもりなのか、それ以外なのか、ディバルの表情はずっと変わりなく何かを考えるようだった。

「……なんて観察力持ってたんだよ、お前」

「この程度なんて、考えりゃわかることじゃないのか？」

雪風丸はディバルを再認識した。

この生物の右に出る者はいないだろう。そして、この生物は危険ゆえにこの生物を超す戯けた生き物はいない、と。

「……俺は、考えても出てこないアイデアがあるから、闘っている

」

ただ自分の全てを表すとそれで収まる、というのがディバルのそれだった。

敵、優しい人間

「デイバル！！ 雪風丸！！ 司教の様子は？」

イルタラが走って来た。

「遅かったな。暇して私が苛められていたのだぞ！」

「い……じめられてた……誰に？」

「コイツだ？」

デイバル 正しくはデイバルの喉 を指差した。

「あ。」

またもや、足で何かを描き始めた。

ユビ サシタラ ダメジャナイノカ？ アア、ダメナンド、と。

（うつわあゝ！！！！ むかつ腹が立つう！！！！）

（なんだ？！ この人お！！！！）

ナニカ イイタイコトハ ナイノカ？、と。

だんだん、エスカレートしている。

「……お前、何が言いたい？ そんなに私が気に入らないのか？」

質問しているくせに引きつった笑顔をした雪風丸は、相当怒っているようだ。

「あ、あのアリスが…… 僕の去り際にこんなこと言っていましたよ。

『お願い。早く、早く霊よ、消えてちょうだい』って。僕、すっかり耳がいいんですよ」

「…… 霊が消える、か。それには長時間を要するからに、今すぐとというのは難しいことだ」

「へ？」とイルタラは首を傾げたがデイバルと雪風丸は「霊が消える」ということを真剣に考えているようだった。

「…… 短時間で消すことは出来るのか？」

「出来るわけがない。“消す”と“放つ”では意味もやり方も違うのだ」

“捕虜”を“消す”ことはできない。が、放つということは短時間での手段はあるのか。

「では……“放つ”ことはできるんだな？」

「少々荒いやり方だがな」

雪風丸は不敵に笑んだ。

「後ろにいる。巻き込まれるぞ！ 霊らは私の前に来るがよい」

雪風丸が軽く準備体操をして、スツと左手を集まった霊たちに向けた。

霊たちは脅えた表情一つしない。自分たちの行く末は決まっているからだ。

「準備は出来たな？ 今ここで未練に苦しむよりは、すっきりと“楽園”へ逝かせてやろう」

奥義・雪崩双曲集・第零番“霜風葬華” 今、迷いし“捕虜ら”を“楽園”へ“放て”

雪風丸が言うと、左手から神々しい光が満ち、霊たちが“放たれた”。

「妙な空気が消えましたね。アリスを呼んでくるよ」

イルタラが走り出そうとすると左肩をディバルに？まれた。

「司教が……動く……！」

それと同時にディバルたちに気付いていなかったはずの司教が人間離れした速さで走り出した。一瞬消えて、姿を現したのはディバルの頭上だった。

不吉な笑みを浮かべた司教は狂った声を出した。

「貴様かぁ？！！ 私の命を奪ったのはア؟؟」

“聖ラコジエの最初の剣”で額からディバルを貫こうとする。

ディバルは“第二番・詞のこめられた”で受け止める。が、少しだけ腕をかすってしまった。

「俺がいつ貴様を殺したという！！ それに貴様は、今、生きているだ」

「レっ、レイラッ?!」

アリスが司教を見て、男の名を発した。

「レイラ? レイラね、生きていたのね?!」

安堵の表情を浮かべる。

「アリスっ、来るな!! こいつは敵だ!!」

それでもアリスは駆け寄ろうとする。

アリス!!!

三つの声が重なった。

一つはディバルが警告する声。一つはイルタラが呼び止める声。

一つは司教 レイラが呼ぶ声。

そして、アリスの耳に届いたのは、レイラの声だけだった。

それと同時に、雪風丸が地を蹴る音と清んだ声を響かせた。

「雪崩双曲集・第三番“雷の巫女”!! アリスをこちらへ!!」

どこからか水がアリスを雪風丸のほうへ引き寄せた。全身がびしょ濡れになっている。

「アリス! 目を覚ませっ。お前はあの怪物を知っているのか?」

「カイブツ……? レイラは怪物なんかじゃない。人間よ!! と

ても優しい人間よ!!」

少し前の過去

アリスの目の前の光景は三年前のディバル襲撃のときが鮮やかに繰り返られていた。

最後に残ったのはアリスとディバルだけだったが、その最後に消えた生命はレイラ・ルネサンスだった。

レイラは最後までアリスを護り抜こうとしていた。教会を封じ込めていたのはアリスだった。しかし、アリスは恐怖に怯え封印を解いてしまった。アリスを殺せば、その教会の封印は解けるはずだった。

レイラは最期まで 醜くなるまで 護ろうとした。
だが、斃れてしまった……。

そのあと、未練が残り亡霊と化した。それから、木を伐り、それを彫って、亡き身体を作り、「外見だけのレイラ・ルネサンス」を創り上げた。決して、それが人間らしいとは言えなかったが 言っってしまったら、人間の存在価値が消失してしまうのだ。

その身体に入るために悪魔が一緒に入った。

悪魔は自分では身体を創れないが身体とシンクロは出来る。また、人間の霊は身体を創れるがシンクロは出来ない。

だから、「悪」と「両」が手を結んだ。

シンクロするとみると堅かった木が人間の皮膚と化し、肉と化し、内臓・呼吸器と化し、脳と化し、「最強の武器」と化した。

そして、旅をして、この村に辿り着いた。

ディバルはこの村に来るだろうと待ち構えていた。何年でも待つと思うっていた。

「神」は「善」と「両」と「悪」という、相容れぬものを創った。そして、それを争わせた。

「神」はサディストだ……。

ディバルと雪風丸は思う。

狂おしく

「善」と「両」と「悪」を人の心、凡てに宿らせ、争わす。

そのとき、人はいつの間にか自身の総てをそれに委ねてしまう。平穏な心を創った者は、全てが平等に存在しているか、全てが死んでしまったか。

青い心を持った者は、「善」「両」「悪」。あるいは、「善」「悪」「両」と順位をつけたか。

黒い心を創った者は、「善」が完全に死んだか、「悪」と「両」が手を結んだか。

不安定な心を創った者は、「両」が強いはずのほかの二つを抑えて一番上に立ったか、最悪な条件は「両」だけしかそこに存在しないということだった。

「不安定」というのは人の生命までもをおびやかす。どこでも。どんな時代であろうとも。

それは、生活、精神を狂わせ、死に追いやる。

レイラは、「悪」と「両」が手を結んだ状態だ。だが、それは長くは続かないだろう。

いつしか、「両」がその心を支配してしまうから……。

「あいつは狂った霊だ！！ アリス、お前にも見えるはずだ！ 身体からはみ出てしまった霊体が！！」

「な…に？ それって、そんなもの見えるわけないわ それに、離して？！ レイラを助けないと。一対二は卑怯よ！！ お願い！

離してっ、レイラが死んじゃうわ！！！！」

うつろな目をして、どこか遠くのレイラを見ていた。

「あいつはもう死んでいる！！ “人形”に入っているあんなものは、人間とは呼べないぞ！！ あれは…… “両”の支配した怪物なのだ！！！！」

「そんなもの……私なんかに分かるわけじゃない！！！！」

アリスは叫び、自力で“雷の巫女”の束縛を解いた。

ディバルは振り下ろされた剣を刃で止め、アリスに言った。

「来るな！！ アリス、お前はここに来てはならない！！ 三年前のようにな、そこで脅えていてくれ。さあ！ 座れ！！！」

舌打ちをして、“第二番”を共鳴させた。そして、それと同時にアリスが座り込んだ。

そこでおとなしくしてくれ。お前が……一番苦しいはずだが、と。

「また……あの光が私を照らすの？」

涙を流し呆然とつぶやくことしか出来ないアリスに、雪風丸が、
「あいつは、ただ、ディバルに嫉妬しているだけだ。気にするな、アリス。お前のせいじゃない。この戦いはどちらにしたって後悔はついてくるのだ。亡霊が放たれるとそれで、後悔。ディバルが死んだら亡霊も放たれて亡霊も放たれ、ディバルもきつと放たれるであらう。結果は何も変わらない……」

「貴様は……天へ上るはずの身。というのに、どうして“遺物”を集めるっ！！」

「バカがっ！ 俺は貴様のことが憎いんだよ。貴様のせいで俺は死んだっ！！！」

“最初の剣”が振り下ろされて“第二番”で跳ね返す。

“聖”だけの剣を持つ“聖人”と“聖”と“悪”を混同してしまった剣を持つ“両人”が刃を向け合った。

斬り倒す！！

同時に二人が走り出した。

「イルタラッ、援護を頼む！」

そして、二人が交差した。

キイイイン

ディバルの“第二番”がしなうて響いた。

「ハッ。俺にその攻撃が効くものかっ。実際の肉体がないんだからな！！！」

音による攻撃は無駄かと思われた。

そして、次の瞬間、

レイラが倒れた。

「！ 何故だっ?!」

問われた。

「フツ」と口元を歪ませ、

「莫迦が。音は振動だ。作り物くらい壊すのは容易。“悪魔”が入っていないながらその程度か…… さあ、お前の最期だ」

シネ……。

ディバルの指が刀の背を這って、無という音を出した。

レイラは叫んで走り去る。

「イヤだあっ!! 俺は死ねない!!!!」

そして、

「森で燃えて灰になるだろうか……」

そういつた瞬間、

「レイラ待つて!! レイラ、レイラぁッ!!!!」

とアリスが狂ったようにレイラを追いかけた。

アリス?!

またも三つの声がアリスを呼ぶ。

しかし、全ての声はアリスの心に響くことがなかった。

湖で呼ぶモノ

「はあっ・・・レイラ?! 何処にいるの? 出て来てよ……ねえっ! お願い、出て来てよ!!」

アリスは暗い森の中で立ち尽くしていた。

その暗黒の世界でレイラを呼ぶが応答は聞こえない。

聞こえるのはそよ風の吹く音とそれで木々が揺れた音。時折、動物が哀しそうに啼く声が聞こえるだけだった。

アリスは森の置く深くまで進んできたらしい。

近くの木にもたれて、やがて崩れるように座った。

「……また、独りにさせるんだね……」

ディバルのことは頭になく、それだけしかつばやくことは出来ない。

すると、森のずっと奥に火の玉のような光が見え隠れしていることに気がついた。

アリスはすくつと立ち上がって光の方向に走ろうとした。

だが、すぐに、

「いたっ」

小さな悲鳴を上げて左太もを擦った。

すると手には、べったりと赤い血がついていた。

「……けが、しちゃったのね」

他人事のようにそれを見て木々を掻き分けて進んでいく。それでも光のある位置は遠のいていく。

ふと思って左を見るとそこにも光っているものがあつた。念のため、右も見してみると無数の光が集まったり離れたたり、ついたり消えたりしている。

「……レイラの命が私を照らし呼んでいるのね? 主よ、我を導きたまえ」

アリスは無数の光のある方向へ歩みを進め始めた。

すると、その無数の光のところにつくと急に視界が開けた。

「……ほ、蛭」

思い込んだ先は澄んだ水にほのかに青白い月を浮かべた湖があった。そこには、同じく青白い光を出す蛭たちが飛び交っていた。

「私を照らし呼んだのは村の人たち……レイラ一人の命にこだわるなつてこと？　でも、特別な人がいるはずなのに……いてはいけない。世界は矛盾してるわよ」

自我を取り戻して嘆いた。

『アリス姫よ、アリス姫。湖の中にお入りなさい。汝の罪が全て洗い流されてゆきますよ、さあ！』

頭上左から男の優しい声が聞こえた。

包まれるように気持ちの良い声の方向を見ると漆黒の髪に白い肌の男が微笑んで立っていた。

『さあ、どうぞ』

言われるがままに湖に入ろうとしたとき、

「アリス！　入っちゃいけない。入らないでくれ」

顔の三分の一が焼けてしまったレイラが走ってきた。

さつとアリスを抱えて岸に上げた。

「え？」

アリスが驚いて声を上げたと同時に腹を殴って気絶させた。

「あんた、誰だよ」

レイラが、“悪”を抑えて“善”と“両”で対話しようとした。

しかし、やつとで魂を“身体”とシンクロさせている状態で実際に闘えるところではなかった。

「へ？　私はアルバート・マズルカ。君と同じような類いの人と言ってもいいかもね」

白肌の男　アルバート・マズルカはのほほんと微笑して見せ、

邪悪な瞳を差し出した。

「復讐者が“人形”のどちらかな？」

「君はどっちだと思う？」

「……両者だと思う」

「そうでもなかったりしてね」と言ってレイラに近づいていく。

教授する

「特別に教えてあげよう、同胞に」

レイラはあらずさつてアリスを護ろうとする。

「私はディバルには何の怨みもない。私が怨むのはディバルの魂だよ　ほら、そうでもないでしょ？」

「あ、ああ。だが、なぜアリスを狙う。アリスは関係ないはずだ」
納得がいかない。アルバート・マズルカとはディバルを通しての間接的な関係にしか過ぎないはずなのだ。

「へ？　ばかみたい。まず、復讐するならその人の大切な人、あるいは好きな人を殺すべきでしょ？　だから殺すんだよ」

「俺はそんなことはしない！！」
剣をしっかりと構える。

「それはそうでしょ。君の愛しいアリス姫はディバルの大切な人でもある。そして君は、アリス姫を助け出したい。そうでしょ？　したらアリス姫を殺しちゃいけない　そして、君にはハンデがついてしまった、ってことだよね？」

湖の水をすくい、少しすすり飲んだ。

「ん、美味しいねエ　でもね、復讐には二つの種類があるんだよ。私がやる復讐は“精神的”に攻撃するもの。君がやってるのは殺していいターゲットがディバル一人しかないから“身体的”にしか出来ないのさ。私はね、今決めたよ。君も殺すのさ」

一歩たじろいて、剣を迎撃に備える。

「そんなボロボロな“人形”になっても戦おうとするんだね。君つてすごく莫迦だ」

「そんな！　あんただって“人形”だろ？！　あんたもいつかは精神が破壊されるはずだ」

普通ならばそうだった。

「君は大莫迦だね。私の“身体”がどれだけの年月を食ってきてる

か分からないんだ。ほら、？人形？だと成長できないでしょ？ 私
は五百年の間この世を彷徨ってきたのさ。そして、ディバルの魂
ラコジエの魂の破片を見た私はすぐに？身体？をつくったんだよ
私が消滅させたはずのラコジエが戻ってきたんだ。協力的で強力な
悪魔と手を結ばなきゃね。私ももう“悪”の占領する“悪人”って
わけさ。自我の消え失せたただの？人形？ってゆーことよ。だから、
殺すことを躊躇わないのさ」

「オーケー？」とニツコリ笑って首を傾げる。それから、クスツ
つと笑い、

「早くこの？身体？とおさらばして、新たな人生ってやつを生きたいよ。でも、これだけ未練ってのが残ってたなら、私は心置きなく成仏できるわけないよ。世界の創造者ラコジエ・キャンズを殺すまではね」

湖に映ったアルバートの顔は見た目以上に機械的だった。

月夜に照らされたアルバートの背中は彼生来の姿を少しだけ取り戻していた。

『アリスー！ どこだ？！ 出てきてくれー！』

三人がアリスを呼んでいる声が聞こえた。

「あらあら、敵が来るみたい　そうそう、私が殺す前にディバルを殺したら、お前の代わりにアリス姫の首を飛ばすことにするよ」

アルバートは笑みを浮かべて手を振った。そして、闇に溶け込むように消えていった。

「アリス……俺ってどうしたらいいんだよ」

気絶して倒れているアリスに呟いた。

アリスを捜す三人の声が近づいてきた。

「またあとで、会いに来るよ」

それだけ言い残してレイラもその場を去っていった。

アリスは細く目をあけてどこへともなくぼんやりと呟いた。

「私だって、どうしたらいいか……」

アリスの頬に涙が光った。その涙が何かを照らすように銀の輝き

を見せ、堕ちていった。

それに誘われたようにデビルたちが湖に出てきた。

明日を望む

「無事だったらしいな、アリス」

雪風丸が首元の動脈に触れて、顔色を確認した。

「……レイラにおなか殴られたところではおぼえてるんだけど、その後は全部記憶が飛んでるわ」

アリスは確かに気絶していた。目を覚ましたときの辺りの空気が酷く痛く張り詰めたものだったから、耐え切れずに泣いたのだった。

「……怖かったのか？」

ディバルが湖の蜚たちを見てアリスに問うた。

「怖かったけど……私、泣かなかったわ」

「嘘つけ。目元を見れば分かる」

アリスの瞳を見つめ、事実を指摘した。

アリスの目元は少し腫れて、泣いていたことがはっきりと窺えた。

「……ごめんね。ディバルのこと忘れてて。私って心のない人ね」

「……それは言うな」

ぶつきらぼうに答えてアリスを腕に抱いた。

「ごめん……」とアリスはそれだけを繰り返言い続けた。

その様子を見て、

「イチヤついておるな どうだ？ 私らもやるか？」

雪風丸がからかうようにイルタラを見ていった。

その雪風丸がとてもいとおしく見えたイルタラは、

「いい って。そんな、年下からのアタックはいけないよ。それに雪風丸は何歳なんですか？ とても小さいですけど？」

この言葉が雪風丸のダイナマイトに火をつけた。

「……………」

「雪風丸？ どうかしましたか？」

肩に置かれた手をつかみ、ギョツと潰すように握り締めた。

「イテテテ……雪風丸。放してもらえませんか……？」

イルタラが顔をのぞいたら、

「誰が小さいのだと言った？ イルタラ……お前かあっ！！ 私
手のひらサイズだといっているのかあっ？！」

そして、雪風丸がイルタラを追いかけ始めた。

一時的な平和が訪れたらしい。

「今夜でこの戦いが終われば、新しい朝日に照らされて新しい
日々を迎えられるかな、デイバル」

「つくづく思うが、お前は詩人だな」

暗い湖にばかりと浮かんだ月はそれこそ鏡に映った世を映し出
しているようだった。

「何やってんだ？ イルタラ、雪風丸」

デイバルが木にもたれてアリスが仁王立ちで立っていた。

注意された当の二人はイルタラの上に雪風丸がちよこんと乗っか
り耳を引っ張っていた。なんとも和やかな情景である。

「そんなことしている暇はないぞ。それとも貴様らは行かないのか
？」

「え？ どこに行くって言うんですか？ その前に レイラ？
さん、出したつけ その方、どこに行ったかってわかるんですか
？」

結局、デイバルたちの追いかけるべき敵というのは、レイラなの
だ。

「剣を持たれている以上平和は訪れないのよ」

「でも、あの人って噂に聞く……前の恋人さんじゃないんですか？
だか」

雪風丸が飛び掛ってイルタラの口を封じ、左腕で首を締め上げた。

「……なんだよ？」

「私がこの程度のこと、デイバルに言っただけでも思った？」

二人はうんうんと大きく頷き、イルタラが雪風丸を覗いた。

「あの、雪風丸は……聞いてないですよね？」

左頬をペチンと叩かれて「は？」と首を傾げた。

「ふんつ。お前はろくに人の話を聞いておらんのか？ それとも世間知らずというものか？」

雪風丸は皮肉を含めて言った。

世間知らずは両者とも……と。

デイバルとアリスが心の中でつつこむが、この二人もそういうところもあるし、その上危険なことを平気で冒すこともどうかしている。

「ま、ケンカしないで。平和って言う大きな花を咲かせにいきましょうよ、ね？」

そして四人はまた、歩き出した。

結界の主

「じゃあ、この辺で二手に分かれるぞ」

ディバルが羅針盤を見て言った。

「結界：がここで途切れているからか。ではお前とアリスで私とイルタラということになるな」

雪風丸がしゃがみこみ一本の糸をのばした。

どんな色にでもなるその色はプツンとそこから切れていた。

「ああ、それでいい。貴様とアリスは意思伝達の印をつけておけ。この結果が元に戻ったとき、すぐに駆けつけてこられるようにだ」
アリスと雪風丸が互いの手のひらを合わせ、次に左胸付近に手を当てると小さなシヨックうけ、数秒の停止時間があつた。

「あの、一つ疑問が出ただけだ」

イルタラが結界の行く末を見ながら言った。

「なんだ？」

「いや、さあ。この結界って誰がしたんだろう？ この森に術師がいるって聞いたけど、まさか力が弱いつて聞いてたのに：そんな術師がこんなに巨大な結界なんて張れるわけないよ」

術師とは、神術や魔術、錬金術などを多方面から研究、使用などをする者だ。そして、森に住まうのは主に魔術に長けている者だという。

「だが、術師といえどその才能を突然開花させたという事例もよくあることだ、と私は聞いたことがある。それにこれは、見た目は神術で作られたものに見えるが実際中心は魔術で構成されている。誰か、拡大鏡を貸してくれ」

「はい、どうぞ。これを使ってください」

四人の誰でもない声が雪風丸に拡大鏡を手渡した。

「ありが…… って、お前誰だよっ」

雪風丸が後ろに跳びのいてその声の主を指さした。

「え？ え〜っと。僕の名前って何だっけ……あ、思い出した。僕はレン・マズルカって言います。どうして、四人とも後ろによつていつていらつしやるんですか？」

闇の中から眼鏡をかけた白い顔がぼっかりと浮かんでいる。その位置にレンは一人取り残されていた。

「いや、だつて怪しいですよ」

「お、驚かすなっ！！！」

「どうしてここにいるのかしら」

「……」

四人からそれぞれの言葉が飛んできた。

「へ？ えっえ〜？！ そんないつぺんに喋られたら、僕聞き取れないですよ〜」

そしてレンが頭を抱えて座り込んだ。

「え？ たった三人の言葉を？」

イルタラが肩に手を置いて横から覗いた。

「実は僕、十年前から誰とも会ってないんですよ。それで自分の名を名乗る機会が無くて……それに、普段、術名しか言わなかったので」

ニツコリ笑うレンにディバルが歩みを進めて問う。

「ここに結界を張ったのは貴様か？」

ギロリと鋭く光る眼がレンの擬似痛覚を刺激し、刺さった。

「貴様は、アルバート・マズルカではないのか？」

さらに質問を重ねる。そして、レンは「アルバート・マズルカ」という言葉に目を輝かせた。

「ぼ、僕ってアルバート様に似ているんですか？！」

「俺はそんなことは言っていない！ 貴様はマズルカなのかと訊いている！」

ディバルは勢い余ってレンに攫みかかろうとしてアリスが後ろから止めた。

「はっ？ 僕は確かにマズルカです。でもこれはアルバート様を尊

敬するために名乗っているだけで本名なんかなんだったか思い出せません」

ディバルの顔が怒りに歪んだ。

「アルバート・マズルカって一体誰なのよ？」

アリスが背中から訊く。

「……」

無言という返答だった。

イルタラはすっきりとした顔立ちのレンをよく見た。

レンは、その見た目からとても若い少年ということが窺えた。年は、十四から十七ほど。

「十年前ですか…… かなり幼いときからのようですね。言葉はどうやって覚えたんですか？」

「屋敷にある本を読んでるからだと思います。どんな本でも揃っているって感じですよ、僕の屋敷は あ、そうだ。家に来ませんか？」

久しぶりに人に会ったので僕はとても嬉しいんですよ」

一年で一番夜が長い空にやっと月が昇った。この月には今にも動き出しそうな奇怪な黒い影がぼっかりと浮かんでいた。まるでそれが現実というように。

「術者の屋敷か… 興味があるが、ディバル、アリス、イルタラ。行ってみないか？」

「わあ、来てくれるんだね？」

ディバルが頷くと、レンは「やったあ！」と声を上げて喜んだ。

「こっちだよ」

レンを先頭に森の奥深くまで歩みを進めた。

希望歌花

「……でかい」と、雪風丸とイルタラの言葉。

「……豪華」と、アリスの言葉。

「……こんなところに、か」と、ディバルの言葉。

「まあ、屋敷にはたくさんの本があるので僕は図書館って呼んでるんですけどね。実際家族が生きてるときは居住のための家だったんですけど、一人じゃ広すぎて今は倉庫に住んでるんです。少し朽ちかけですけど広いよりも住みやすいんですよ」

「こつちです」とレンが手で招いている先は樹と樹の間に引っ掛けられたようなログハウスの家屋だった。そして、そのウッドハウスに入っていた。

「さあ、お茶を。認めの葉を使ったお茶です。客人をもてなすとき一番最初に淹れるんです」

深緑の茶は煎り立てだった。

「あの、僕達って本当にこんなところにいてよかったですか？
レイラさんを」

イルタラは座ってお茶を飲んでいる二人に言う。雪風丸は一つの植木鉢に目を向けていた。

「このつぼみ、埃が被っている様子だが造花なのか、レン？」

雪風丸の後ろに歩み寄ってきたレンに問うた。

「いえ、本物の花です。私のつけた名前は『希望歌花』。歌うと気持ちよさそうに揺れるんです。それも希望を持つ歌ならとつても機嫌良くって、悲しみを語るものなら寂しそうにしょんぼりするんです。でも、今のままだと花は咲きません」

レンは花を越えてその先を見透かしたような表情をした。

「何故だ？ 特殊な育て方か？」

「いえ、違います。『希望歌花』は誰かの夢、希望と誰かの血が必要なんです。それにそれは勇敢な人で量は大量でそれが条件として

適ったとき、花は真つ赤な花卉をつけて、その夢、希望を叶えるということです」

レンは自分の手の中にある血潮たちを尊く思いながら言った。

「私には闘う力さえないんです。これは万能でなきゃできないことなんですよ」

希望に望み、絶望に堕ちたような瞳。

「単純だな。私らが血をお前に捧げればいいんだろ？」

「いや、私には夢も希望もないですよ……絶望の果てまで堕ちたんだ」

ふとレンは視線に気がついた。一つは明らかにディバルが睨んだ感覚ともう一つ、何処からかの視線だった。

「……どこでその絶望つてのを見たんだよ」

目を離してはいけないと思うほど素直にレンの目を射ていた。

「えっ……私の家族が死んだときです」

束縛の状態を逃れるために必死で目を閉じた。

「絶望の意味さえ判らずに術者つて名乗ってんのか、このエセ術者」

「ディバル！ 何てこと言ってるんだ、駄目じゃないか。レンの哀

しみが君には分かるんですか？ 家族が死んだら誰だっ

」

「貴様は分かるのか？ 絶望と哀しみが」

ディバルがいきなりナイフをイルタラの喉元に当てた。

他の三人は呆然とその光景を見ている。

「絶望つてのは、この世だけじゃなくあの世までも希望のカケラを見つけないことだ。生きていても意味がなく、死のうとしてもあの世に逝けない。逝けたとしてもまた引き戻される。それから、あのことだ」

ディバルはとても幼い十四歳の頃、平和な世界が崩れる元凶を見てしまった。そのときに自害もしたのにディバルは死ねなかった。周りの者は全て消え、徒、孤独に彷徨った。自分が世界を変えることの出来る聖人だと気づかないまま。

そのとき、ディバルはこれが『絶望の一步前』ということを知っ

た。

だが、そのときに過去 前世の記憶が蘇った。そして、前世が死ぬ直前に『希望へ堕ちる』とふいに思ったことがはっきりと伝わった。

人は二つの死が待っているのだろうか。

希望の名の下、絶望の名の下。

デイバルはこれだけの死に方にこだわり殺す者として殺してきた。来世のその人が白く潔い心で明るい生活を送れるように。来世の人々が明るい平和な世界で暮らせるように。それは産まれるずっと前から願ってきた。

再び上がる復讐の幕

「じゃあ、復讐って何のためにするの？」

アリスが髪を弄りながら訊く。

『復讐、それには二つある。まず一つ、相手の大切な人を殺す。二つ、その本人を殺す』

壁の外からレイラの声が聴こえる。

木の壁とレイラの？身体？とが融合して揺れた。

『俺は希望を叶えたい。ディバル、お前は勇者なんだろう？俺に前の血を捧げろ、そして死ね』

木の壁から出てきたレイラは焼けたはずの顔がすっかりもとの戻っていた。レイラの出てきた壁には焦げた後がはつきりと残っている。

「レイラ……？ どうして戻ってるのよ」

恐怖に怯えた声でレイラを見る。

「アリス、あの時は護れなくてごめん。でも、遅くなっただけど君を迎えに来たよ。君は俺の元に戻るべきだ。さあ一緒に行こう。そして、ディバルという名の勇者を永遠に滅ぼして、俺たちは幸せに暮らそう」

ニッコリと笑って手を差し伸べるレイラは作りたての人形と同じ様に不自然な表情が見えた。

「“悪”に全てを握られたのか、狂いおって……？人形？が生

身になれるわけもない。すべての未練が果たせたら消えるだろう魂がそこまでの欲を持つとは。奴はこの私、雪風丸が消す！」

と、傍にいたレンが、

「状況は全て分かりました。『希望歌花』は“悪”に満ちた人が近くにいるか、その人が願うとそれと全く反対のことが起こります。

彼の場合は理想は崩され、こちら側が有利になります。しかしアリスさんの命が終わってしまいます」

雪風丸が頷くと、

「では、彼を消させて頂きます！」

レンが魔術を展開させた。

「テナン・シルク、ダークステージオープン。全ての力で敵・レイラ・ルネサンスをあの世へ送る！！」

「まてっ?!」という間もなく、レンがベルトに挟んであった杖を持つ。目の色がスツと変わった。青かった左目が赤黒くなったのだ。右目はまるで役目がないかのように閉じかけている。

「関係のない奴は首を突っ込まなくてもいいんですよ？」

レイラはレンに歩み寄る。

「嫌だ!! 近づくな。私を“悪”に侵さないでくれ！」

そというレンは目に涙を溜めていた。そこでイルタラが楯になった。

「君はいいんだ。僕達が君に迷惑をかけてるんだ。君は闘わなくていい。ここは僕がつ」

イルタラがレイラに腹を殴られ、血を吐いた。アリスが今にも飛び出して止めようとしているところをディバルが前に出てきて止める。

「アリス、すまない。これで負けたら素直に奴のところに行つてやれ。そしたらお前が奴の心を清めてやるんだ、いいな？」

アリスが後ろからディバルにすがりついた。

「レイラのとこって私に死ねっていうこと？ 嫌よ、あなたと一緒に場所に行く。私は過去なんかと過ごしたくないわ！ 絶対…に…」

ディバルがアリスの手を離れた。

「俺の言っていることがわかってないらしいな。俺の、いや俺たちの目指すものって何だったか覚えてんのか？」

ディバルが耳元で囁いた。そしてアリスが崩れて呟いた。

「私たちが目指すもの、平等な安泰的な時代 平和を作ること」

そして死と

「俺に刃向かうな。伝説の花の主」

レイラがレンを蹴りつけた。

「嫌だ、お前みたいに復讐するためにこの世にのさばってる奴の話なんて聴くもんか！ 母さん達だって絶対にこの世に残ってないよ。私は絶対にお前に『希望歌花』を譲らない！！！」

下からレイラを見上げるレンはそこにいる誰よりも鋭い決意に満ちていた。

「いや、貴様の家族はずっと貴様のことを見守っていたらしいぞ」

ディバルが木の上からロープを翻し飛び降りてきた。雪風丸はウツドハウスの手すりから先へは出ようとはせず手すりにもたれて蹲っていた。

「魔術の…展開、つをと、め…て、くれ」

苦しげな息づかいから、雪風丸は今闘っている“善”の魔術が“悪”の魔術かに影響されていた。その理由とは呪いにかかっていた。戦闘の場で同じ術同士が相対したとき、力の強いほうのハンデを負うという病んだ呪いだった。力が強ければ強いほど全身から痛みが溢れ出した。そして、その強い力が味方ならばもとより体が蝕まれていく。

レンはレイラに適わないと分かりながら立ち向かっていった。そのしぶとさに耐えかねたレイラはレイラにとつての最強の武器？聖ラコジエの最初の剣“で斬りつけた。

防御壁をつくり相手の巨大な力を受け止めた。そしてそばからディバルがレイラに斬りかかっていった。

「ふんっ……二度も同じ手が見えるかよ 二重防壁」

ディバルの前と後ろに防壁が出来上がった。時に後ろの壁はレンの隣まで伸びていた。そしてレンの壁をあわせ三枚の防壁がレイラの最高の武器と化した。

ディバルの斬った波動がレイラの前の防壁に跳ね返り後ろの防壁にぶつかり、そのままレンに攻撃が当たった。レンは吹き飛ばされ、近くの木に当たり止った。レンはもう一度、立ち直ろうとしたが、自分の変化に気がついた。ディバルの攻撃は完全にレンを動けなくしていた。それを見た雪風丸がウッドハウスに戻り『希望歌花』を持ち出してきた。

「レン、ディバル願え！ レンの傷が治れと。私が犠牲になる！ お前の命となるから、なあ！」

雪風丸は自分を犠牲にしてもレンを助けたかった。何故そんな気持ちになるかなんて死ぬ直前と決めた雪風丸には関係がなかった。

「だめっ、です…私じゃなくて世界を。この広い世界の民を…救ってください。私が血を捧げます…ね？」

レンは痛々しく笑みを浮かべて涙を流した。

「お願いです…」

それを言うとき、レンは痛みを無言で堪えていた。

「冗談はよしてよ…」

その言葉どおりに表情を浮かべた。それでも瞳の奥にある湖は悲しみという花しか浮かばせてはくれなかった。

そして、アリスもウッドハウスから出てきた。

「こうなつて貴様はいつらからあの花を奪うのか？」

ディバルがレイラに訊いた。

だが、その瞬間にレイラの？身体？は音を立てて崩れていった。

死んだわけではない。既に死んでいるから。消滅したわけでもない。

「逃げた……」

イルタラがやっと立ち上がった。

「ごめん、何かの術にかけられてたみたいでした」

そして、ディバルが司祭のような、いや神のような目でレンを見た。

「レンの最期に祝福を。世界の始期に祝福を！」

真夜中にディバルの声が響き渡り、世界が光に満ちた。

500年前の終焉

「やっと俺たちの世界が出来た」

「でも、“悪”と共存なんて俺たちにはできない　だから今すぐにでも首切って死んで皆に感染しないようにしないといけないんだよ」

その峰には二人の男が立っていた。二人とも兵士のような服を着ていた。

アルバートは複雑な思いを持って泣きじゃくった。隣でのん気に座っているラコジエは、

「いいんじゃない？　だってさ、死んでまた転生してれば、きっと俺たちまた会えるし、あの世で落ち合うことだって出来るよ　それにさ、今生き残って少しの間未来を見るよりもその先の未来を永く見るじゃないか」

「もし、その未来が荒れてたら、お前はどうするんだよ」

足を持ち蹲って、拗ねながら訊くアルバートは戦乱のために奪われた子供という感情を取り戻したようだった。

「いいさ、その命使っても止めたって神様は何も言わないさ」

ニッコリ笑うラコジエはまるで女性のようなしなやかさで地面を蹴り、踏みしめた。

「な、これ使えよ。切れ味抜群だから一思いに死ねるぞ」

ラコジエはベルトポシェットの中から一滴の血にも濡れたことのない純粹なナイフを取り出した。

「自害するために持ってた。つか、さっきまでの戦い終わったらずっと死のうって思ってた。俺、ずっとお前を騙してたから」

ラコジエはアルバートに真実を打ち明けた。戦いが始まる前から自分の中には“悪”が在ったこと。それでも、“悪”を押し殺したかったがその“悪”がどうしても消えてくれなかったこと

「ごめんな。俺　今から狂うよ」

そして、それがラコジエの最後の言葉となった。

するとラコジエの背からは悪魔のような羽根が生えアルバートに襲い掛かった。

「ラコジエ……最期だよ」

アルバートは“第二番・詞にこめられた”を振り下ろした。

ラコジエは咆哮をあげて元に戻った。だが、致命傷がその身体に遺されて、ラコジエは一瞬で死を迎えた。

ああ、希望に堕ちる……

そう思い死んだ。

アルバートには漆黒の羽根たちが舞い落ちてきた。

「俺が死ねるわけないよ　お前、来世なんてもの創るなよ」

アルバートは死ななかった。

そのあと、民たちからその二人は神として崇められた。

これこそが　この世が狂っている証拠だった。

500年前の終焉（後書き）

ここまで読んでいただき、ありがとうございます。

この作品は今から三年前に電撃大賞に応募し、見事に落ちた作品です。

せっかくなので、すべて載せました。

是非、感想などいただけると、嬉しく思います。

けど、現在の自分にとっては結構な駄作なので、酷評はなかなかの痛手かと。

しかし（また逆接かよ）、酷評でもいいです。

嗚呼、支離滅裂になり始めました。ここで、失礼します。
ありがとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2859d/>

世界にとっての喜び

2010年10月8日14時38分発行